

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 11 日現在

機関番号：13601

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009-2011

課題番号：21720171

研究課題名（和文） 自習用教材作成・高大連携・相同性研究に生かす、慣用句を鍵に行う前置詞棲み分け研究

研究課題名（英文） A Study on the “Habitat Segregations” of Prepositions through their Idiomatic Phrases: For the Research on Homology, for Creation of Self-Study Materials, and for the Cooperation between High School and University

研究代表者

花崎 美紀 (HANAZAKI MIKI)

信州大学・人文学部・准教授

研究者番号：80345727

研究成果の概要（和文）：

本研究課題の研究目的は、一般的に「機能語」と呼ばれる語のうち、きわめて「多義」的に見える前置詞の意味を、各前置詞の意味の「棲み分け」をもとに、また、慣用表現を手がかりに、明らかにし、日英語の相同性（英語は<有界的・結果志向・スルの>であり、日本語は<無界的・経過志向・ナル的>である）を求める手がかりとすることである。

研究成果の概要（英文）：

This study has conducted a “semantic” research on very “polysemous” prepositions, which are usually regarded mistakenly as “function” words, i.e., void of semantic meanings, through looking closely at their idiomatic phrases, in order to provide a key to the homology studies on English and Japanese.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：英語学

キーワード：前置詞、意味論、慣用句、高大連携、相同性、自学自習用教材

1. 研究開始当初の背景

前置詞の多義研究は、1語の多義を扱う Semasiological な研究 (例: fruit は果実・結果・・という意味があるとする研究) に終始している感があるが、本研究は、それに近似義語を扱う Onomasiological な視点 (例: 果実を表す語には fruit・nut・・があるとする視点) を加え、その Onomasiological な意味の重なる緊張関係が意味拡張を阻止すると考えている。先行研究の中には、2語以上を扱う研究もあるが、それらの違いを述べるにとどまり、その違いが意味拡張を制限するといったような「動的」な研究はまだない。

私は、以前、前置詞の多義を従来の意味論でしばしば行われるように Semasiological な視点で研究してきた。しかし、その一連の研究で、従来のメタファー・メトニミーによって意味拡張を説明しようとする理論は、(1)意味が際限なく広がることを阻止することはできず、(2)新しい意味の予測が不可能であることがわかった。そこで、意味拡張は、複数の可能性が緊張関係の中に存在した後、それぞれの語の弁別的意思要素により取捨選択されることを通して行われるという見解、つまり、pragmatic strengthening を中心とした行為理論によって意味「用法」の拡張の可能性を探り、さらに、Onomasiological な視点にたち、**近似義語の中心義が意味拡張を制限する**という立場をとれば、上述の問題は解決されることに気がついた。さらに、その緊張関係の中で、意味拡張の可能性を阻止されたものは、**慣用表現**としてのみ存在するということがわかった。これまで前置詞は、機能語として意味論で語られることはほとんどなく、意味論で語られる場合は、一つの語の多義を記述する研究がほとんどであった。

例えば、for の多義を説明するためには、同じように、2つのものが空間的に並列されることを表すことのできる with や by との関係のみをみることにより、際限ない意味拡張を防いだ意味記述が可能となる。また、「～の間中」という意味は、by や during を始めとするその他の前置詞によって表される可能性があり、それらが共存する緊張関係にあったと思われるが、繰り返し使われる中で during が選択され、Onomasiologically に意味拡張を阻止された by は by day という慣用表現でのみ存在し続けているといえる。

2. 研究の目的

これまでの前置詞研究は、1つの語の多義を記述するものがほとんどであった。しかし、私の一連の研究により、多義の説明には、関連する語との関係を語る事が不可欠であるということが明らかになった。

(例えば、for の多義を説明するためには、with との関係のみをみる事が必須である。詳しくは下段に述べるが、メタファー・メトニミーのみで意味拡張を説明すると、どんなドメインにも広がることができ、意味が際限なく広がることを阻止出来ない。意味拡張を制限する存在としての、近似義語(with)研究なしでは、for の多義は説明し得ない。)

よって、本研究は、前置詞の中でも、「近接性」を表す**すべて**の前置詞の**棲み分け**を明らかにすることを通して、前置詞の多義を研究しようとするものである。

また、英語らしさ・日本語らしさに関する研究は近年、相同性研究(cross-categorical studies)としてまとまりつつあるが、それらの研究が扱う言語事象の多くは文・談話レベルのものである。本研究は、語レベルで、しかも、一般的には「機能語」と呼ばれる語に意義を見だし、それらの語も他レベルと相同的であることを述べようとするものである。

まとめると、本研究は、日英語の相同性研究に語レベルの研究として寄与し、また、エラーナリシスおよび教材開発を通して高大連携と自学自習用教材として結実させることが目的であるといえる。

3. 研究の方法

本研究は、前置詞研究において、Semasiological な視点と Onomasiological な手法を使い、また、Onomasiological な視点は、慣用表現に注目することにより、近似義語の動的な棲み分けを記述する。また、その中には、歴史的研究をも取り入れる。

具体的には、2段階にわけて研究を行い、3方法で研究結果を社会に還元する。

第1段階として Semasiological な研究を行い、1語の現代英語における用法を整理しそこから仮の意味ネットワークを作成しそれを古い英語における用法を整理して補強する。

具体的には、対象語の現代英語での用法を、先行研究渉猟結果を参考にしながら整理し、仮の意味ネットワークを作成する。意味ネットワークは、前頁の図のようになると見込まれる。その手順は次(1)～(8)の通りである。なお、古英語期・中英語期・初期近代英語期の英語についても以下の(1)～(7)の作業をし、また、(9)をする。

(1) 採集したデータを使って、対象語の現代英語での用例を収集する。

(2) それらの用例を意味に従っていくつかのグループに分類する。

(3) それぞれのグループのイメージスキーマを作成する。

(4) イメージスキーマの共通点・相違

点を手がかりに、近い用法どうしを結びつける。

(5) 結果として中心にくる用法を**中心スキーマ**と認定する。

(6) 他の用法とつながらない用法 (**孤立用法**)を確認する。

(7) 「慣用表現」を確認する。

(8) 高校生の起こしやすい間違いがなぜ起こるかを確認する。

(9) 過去の用法について、他言語 (特にフランス語、北欧語) での用法が影響を与えている可能性について調査する。

第2に、Onomasiological な研究を行い、関連する語を、孤立用法・慣用表現を元に検証し、対象前置詞の棲み分けを明らかにする。言い換えると、Onomasiologically に、関連する語を、孤立用法・慣用表現をもとに検証し、対象前置詞の棲み分けを明らかにする。そして、前置詞の Word Net を構築する。

研究結果の社会への還元は3方法による。すなわち、高大連携の中でその研究結果をもとに、大学生および高校生への正しい前置詞の使い方を指導する。また、モジュール教材 (テーマ別の小教材) としてサーバーに蓄積し、ゆとり教育の元で教育されてきて実力にばらつきのある大学生が自学自習できるような教材として提供する。そして、研究結果は報告書として本に結実する。

4. 研究成果

本研究の意義・重要性は次の4点である。
<1点目>前置詞をそれらの「棲み分け」を元に研究するという点。これまでの前置詞研究は、1つの語の多義を記述するものがほとんどであったが、本研究は、研究代表者の一連の研究により、多義の説明には、関連する語との関係を語る事が不可欠であるということが明らかになったことを元に、近い意味をもつ前置詞との関係において前置詞を研究している。<2点目>慣用句こそがその「棲み分け」を表すという、これまでの研究代表者の一連の研究をもとに、慣用句を鍵として研究している点。<3点目>前置詞研究を相同性研究に応用しようとしている点。日英語の様々な現象が、それぞれの言語ごとに一つの傾向にそっているとする日英語の相同性を求める研究は、従来は、文レベル (受動態など) やそれ以上のレベル (ナラティブの構造など) のものであることが多いのに対して、本研究は、従来より「機能語」の筆頭ともされる前置詞や格助詞にも同じ傾向が見られることを明らかにしようとしている。<4点目>その研究結果を、大学生の自学自習用教材として活用するとともに、高大連携に生かしていこうとしている点。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10件)

① 花崎美紀, “Forの意味論再考”, 『人文科学論集』46号, 85-108, 2012年, 査読有

② 花崎美紀, “相同性という視点から見る、日米の出産と育児の実際”, 『柿の木助産師学会会報』22号, 79-84, 2012年, 査読無

③ 花崎美紀, “双方向型中高大連携: 内発的動機付けを高めるための中高大連携”, 『人文科学論集』45巻, 35-52, 2011年, 査読有

④ 花崎美紀, “日本語および英語、それぞれの言語文化に見られる相同性についての一考察 -Asの意味論を中心に-”, 『言語と人間』2011年号1ページ, 2011年, 査読無

⑤ 花崎美紀, “「事態間読み込み」という観点からみるAsの意味論”, 『人文科学論集』44号, 65-75, 2010年, 査読有

⑥ 花崎一夫・花崎美紀, “日英語の語レベルにおける相同性をめぐって”, 『信州大学人文社会科学研究』3号, 56-70, 2010年, 査読有

⑦ 花崎美紀, “間主観性の観点からみるAsの意味論”, 『言語の間主観性 -認知・文化の多様な姿を探る』19-40, 早稲田大学出版会, 2010年, 査読有

⑧ 花崎美紀・花崎一夫, “上を表す前置詞 Upon/ On そして In の意味論 -前置詞の包括的な分析にむけて-”, 『人文科学論集』43号, 61-69, 2009年, 査読有

⑨ 花崎一夫・花崎美紀, “大学教育の質を高めるための高大連携のあり方 -英語の前置詞の学習を例にとり-”, 『信州大学人文社会科学研究』2号, 90-104, 2009年, 査読有

⑩ 花崎美紀・花崎一夫・谷みゆき・多々良直弘・八木橋宏勇, “日英語における相同性を考える<有界性>と<無界性>”, 『英文学研究支部統合号中部英文学』29号, 81-92, 2009年, 査読有

[学会発表] (計3件)

① 花崎美紀, “日本語および英語、それぞれの言語文化にみられる相同性についての一考察: Asの意味論を中心に”, 言語と人間, 2011年9月

② 花崎美紀, “相同性という視点から見る、日米の出産と育児の実際”, 柿の木助産師学会, 2011年9月

③ 花崎美紀, “The Semantics of As:

Intersubjectiv 'ity' in Polysemy” ,
ELSJ International Spring Forum, 2011
年4月

[図書] (計2件)

- ① 花崎美紀, 『自習用教材作成・高大連携・相同性研究に生かす、慣用句を鍵に行う前置詞棲み分け研究』, プイツーソリューションズ, 2012年3月, 269頁
- ② 花崎美紀, 『言語の間主観性—認知・文化の多様な姿を探る』, 武黒麻紀子編, 早稲田出版会, 2011年2月, 126頁

[その他]

自習用教材2件

- ①Over
- ②For

6. 研究組織

(1) 研究代表者

花崎 美紀 (HANAZAKI MIKI)
信州大学・人文学部・准教授
研究者番号：80345727